

国木田独歩

武蔵野





武

蔵

野



## 一

「武蔵野むさしのの 倂おもかげは今纔わづかに入間郡いるまごほりに残れり」と自分は文  
 政年間に出来た地図で見た事がある。そしてその地図に  
 入間郡「小手こて指原さしはらく久米川めがわは古戦場なり太平記げんこう元弘三年五  
 月十一日源平小手指原にて戦ふ事一日か内に三十余度日  
 暮れは平家三里退て久米川に陣を取る明あくれは源氏久米川  
 の陣へ押寄おしよすると載せたるはこの辺なるべし」と書込んで

あるのを読んだ事がある。自分は武蔵野の跡の纒のこつに残のこつて居る処ところとは定めてこの古戦場あたりではあるまいかと思おもつて、一度行いって見る積つもりで居て未まだ行かないが実際は今も矢張やはりその通りであろうかと危ぶんで居る。兎とも角かく、画えや歌でばかり想像して居る武蔵野をその倂なりばかりでも見たいものとは自分ばかりの願ねがいではあるまい。それほどの武蔵野が今は果していかがであるか、自分は詳くわしくこの問に答えて自分を満足させたいとの望のぞみを起したことは実に一年前の事であつて、今は益々ますますこの望のぞみが大きくなつて来た。

さてこの望が果して自分の力で達せらるるであろうか。自分は出来ないとは言わぬ。容易でないと信じて居る、それだけ自分は今の武蔵野に興味を感じて居る。多分同感の人も少なからぬことと思う。

それで今、少しく端緒をここに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じた処かいを書いて自分の望の一小部分を果したい。先まず自分がかの問に下すべき答は武蔵野の美び今も昔に劣らずとの一語である。昔の武蔵野は実地見てどんなに美であったことやら、それは想像にも及ばんほどであったに相違あるまいが、自分が今見る武蔵野の美

しさは斯<sup>かか</sup>る誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かして居るのである。自分は武蔵野の美と言った、美といわんより寧<sup>むし</sup>ろ詩趣<sup>ししゆ</sup>といたい、その方が適切と思われる。

## 二

そこで自分は材料不足の処から自分の日記を種にして見たい。自分は二十九年の秋の初<sup>はじめ</sup>から春の初まで、渋谷村の小さな茅屋<sup>ぼうおく</sup>に住<sup>すん</sup>で居た。自分がかの望を起したのもその時の事、又た秋から冬の事のみを今書くというのも



そのわけである。

九○月○七○日○——「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるととき林影一時に煌めく、——」

これが今の武蔵野の秋の初である。林はまだ夏の緑のままでありながら空模様が夏と全く変ってきて雨雲の南風につれて武蔵野の空低く頻りに雨を送るその晴間には日の光水気を帯びて彼方の林に落ち此方の杜にかがやく。自分は屢々思った、こんな日に武蔵野を大観することが出来たら如何に美しい事だろうか。二日置いて九

日の日記にも「風強く秋声野やにみつ、浮雲ふうん変幻へんげんたり」とある。恰度ちやうどこの頃はこんな天気が続つづいて大空と野との景色が間断なく変化して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしく極めて趣味深く自分は感じた。

先ずこれを今の武蔵野の秋の発端ほったんとして、自分は冬の終わるころまでの日記を左に並べて、変化の大略と光景の要素とを示して置かんとする。

九月十九日——「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫声しげし、天地の心なほ目さめぬが如ごとし。」  
 同二十一日——「秋天拭ぬぐふが如し、木葉火の如くかが

やく。」

十月十九日——「月明かに林影黒し。」

同二十五日——「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入り

て雲の絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を

出で野を歩み林を訪ふ。」

同二十六日——「午後林を訪ふ。林の奥に座して四顧

し、傾聴し、睇視し、黙想す。」

十一月四日——「天高く気澄む、夕暮に独り風吹く野

に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地

平線上に黒し。星光一点、暮色漸く到り、林影漸

く遠し。」

同十八日——「月を踏で散歩す、青煙地を這ひ月光林

に砕く。」

同十九日——「天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目

黄葉の中緑樹を雑ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影な

し。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐ

ぐる。」

同二十二日——「夜更けぬ、戸外は林をわたる風声も

のすごし。滴声頻なれども雨は已に止みたりとお

ぼし。」

同○二○三○日——「昨夜の風雨にて木葉殆ど揺落せり。

同●二●日●も●殆●ど●刈●り●取●ら●る●。●冬●枯●の●淋●し●き●様●と●な●り●ぬ●。」

同○二○四○日——「木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、

心も消え入らんばかり懐し。」

同○二○六○日——夜十時記す「屋外は風雨の声ものすご

し。滴声相応ず。今日は終日霧たちこめて野や林

や永久とこしへの夢に入りたらんごとく。午後犬を伴ふて

散歩す。林に入り黙坐もくざす。犬眠る。水流林より出

でて林に入る、落葉を浮べて流る。をりをり時雨

しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静

かなり。」

同○二十七日——「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、

日○う○ら○ら○か○に○昇○り○ぬ○。屋○後○の○丘○に○立○て○望○め○ば○富○士○

山○真○白○ろ○に○連○山○の○上○に○聳○ゆ○。風○清○く○気○澄○め○り○。

げ○に○初○冬○の○朝○な○る○か○な○。

田○面○に○水○あ○ふ○れ○、林○影○倒○に○映○れ○り○。」

十○二○月○二○日○——「今○朝○霜○、雪○の○如○く○朝○日○に○き○ら○め○き○て

美○事○な○り○。暫○く○し○て○薄○雲○か○か○り○日○光○寒○し○。」

同○二○十○二○日○——「雪○初○て○降○る○。」

三○十○年○一○月○十○三○日○——「夜○更○け○ぬ○。風○死○し○林○黙○す○。雪

頻りに降る。燈をかかげて戸外をうかがふ、降雪しか、  
 火影ほかげにきらめきて舞ふ。ああ武蔵野沈黙す。而も  
 耳を澄すませば遠かなたき彼方の林をわたる風の音す、果し  
 て風声か。」

同十四日——「今朝大雪、葡萄ぶどう棚墮だちぬ。」

夜更けぬ。梢をわたる風の音遠く聞ゆ、ああこれ  
 武蔵野の林より林をわたる冬の夜寒よさむのこがらし凧こがらしなるか  
 な。雪どけの滴声軒をめぐる。」

同二十日——「美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱白  
 銀の如くきらめく。小鳥梢に囀せうとうず。梢頭針の如し。」

二〇月〇八〇日〇——「梅咲きぬ。月漸く美なり。」

三〇月〇十三〇日〇——「夜十二時、月傾き風急に、雲わき、

林鳴る。」

同〇二〇一〇日〇——「夜十一時。屋外の風声をきく、たちま忽

ち遠く忽ち近し。春や襲ひし、冬や遁のがれし。」

### 三

昔の武蔵野は萱原かやはらのはてなき光景を以て絶類もつの美を鳴  
らして居たように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林はやし



である。林は実に今の武蔵野の特色といつても宜よい。則すなわ  
 ち木は重おもに檜ならの類たぐいで冬は悉ことごとく落葉し、春は滴したたるばか  
 りの新緑萌もえ出いずるその変化が秩父嶺ちちぶれい以東十数里の野  
 一齊いっせいに行われて、春夏秋冬を通じ霞かすみに雨に月に風に霧  
 に時雨しぐれに雪に、緑蔭りよくいんに紅葉に、様々の光景を呈するそ  
 の妙ちよつとは一寸西国地方又た東北の者には解し兼ねるのであ  
 る。元来日本人はこれまで檜の類の落葉林の美を余り知  
 らなかつた様である。林といえは重に松林のみが日本の  
 文学美術の上に認められて居て、歌にも檜林の奥で時雨  
 を聞くという様なことは見当らない。自分も西国に人と

なつて少年の時学生として初はじめて東京に上つてから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至いたつたのは近來の事で、それも左の文章が大おおいに自分を教えたのである。

「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺かばの林の中に座していたことが有つた。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生ま暖かな日かげも射さしてまことに気まぐれな空そら合あひ。あわあわしい白しら雲うが空そら一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬またたく間雲切れがして、無理に押し分けたような雲間から澄さみて怜されかし気げに見える人の眼の如くに朗かに晴れた

蒼空あおぞらがのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かすかに戦そよいだが、その音を聞きいたばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白そうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌しやべりでもなかったが、只ただ漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語せきごの声で有った。そよ吹く風は忍ぶように木末こずえを伝ツた、照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようすが間断なく移り変ツた、或あるいはそこに在りとあ

る物総すべて一時に微笑したように、隈くまなくあかみわたツて、さのみ繁しげくもない樺のほそぼそとした幹は思いがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散り布しいた、細かな落ち葉は俄にわかに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしツたような『ペアポロトニク』(蕨わらびの類い)のみごとな茎、加し之かも熟つえ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして目前あたりに透かして見られた。

或はまた四辺あたり一面俄かに薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積ツ

た儘ままでまた日の眼に逢わぬ雪のように、白くおぼろに  
 霞む——と小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するよ  
 うにバラバラと降ッて通ッた。樺の木の葉は著しく光  
 沢が褪さめても流石さすがに尚なお青かつた、が只そちここに立  
 つ稚木わかぎのみは総いて赤くも黄ろくも色づいて、おりおり  
 日の光りが今いま雨に濡ぬれたばかりの細枝の繁みを漏れ  
 て滑りながらに脱けて来るのをあびては、キラキラと  
 きらめいた。」  
 則ちこれはツルゲーネフの書たるものを二葉亭ふたばていが訳し  
 て「あいびき」と題した短編の冒頭にある一節であつて、

自分がかかると落葉林の趣きを解するに至ったのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これは露西亞ロシアの景で而も林しかは樺の木で、武蔵野の林は櫛の木、植物帯からいうと甚はなはだ異て居るが落葉林の趣は同じ事である。自分は屢々思うた、若し武蔵野の林が櫛の類でなく、松か何かであつたら極めて平凡な変化に乏しい色彩一様なものとなつて左まで珍重するに足らないだらうと。

櫛の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私ささや語く。風こがらしが叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かの如く遠く

飛び去る。木の葉落ち尽せば、数十里の方域に亘る林が  
一時に裸体はだかになって、蒼あおずんだ冬の空が高くこの上に垂  
れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空氣が一段澄みわ  
たる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の  
記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視ていしし、黙想す  
と書かた。「あいびき」にも、自分は座して、四顧して、  
そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くといいこ  
とがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心  
に適かなっているだろう。秋ならば林のうちより起る音、冬  
ならば林の彼方かなた遠く響く音。

鳥の羽音、さええず轉る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、  
 叫ぶ声。くさむら叢の蔭、林の奥にすだく虫の音。からぐるまにぐるま空車荷車  
 の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。ひづめ蹄で落葉を  
 蹶散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連  
 れで遠乗とおのりに出かけた外国人である。何事をか声高こわだかに話し  
 ながらゆく村の者のだみ声、それも何時いっしか、遠とおざかり  
 ゆく。独り淋しそうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲  
 声。隣の林でだしぬけに起る銃音つつおと。自分が一度犬をつれ、  
 近処の林を訪い、切株に腰をかけて書ほんを読んで居ると、  
 突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとに臥ねて



居た犬が耳を立ててきつとその方を見詰めた。それぎり  
で有った。多分栗くりが落ちたのであろう、武蔵野には栗樹くりのき  
も随分多いから。若もしそれ時雨しぐれの音に至てはこれほど幽  
寂のものはない。山家の時雨は我国でも和歌の題にまで  
なつて居るが、広い、広い、野末から野末へと林を越え、  
杜もりを越え、田を横ぎり、又た林を越えて、しのびやかに  
通り過ゆく時雨の音の如何にも幽しずかで、又た鷹揚おうような趣きが  
あつて、優しく懐ゆかしいのは、実に武蔵野の時雨の特色で  
あろう。自分が嘗かつて北海道の深林で時雨に逢あつた事がある、  
これは又た人跡絶無の大森林であるからその趣は更に深

いが、その代り、武蔵野の時雨の更に人なつかしく、私語ささやくが如き趣はない。

秋の中ごろから冬の初、試みに中野あたり、或は渋谷、

世田ヶ谷、又は小金井こがねいの奥の林を訪うて、暫く座しばらて散すわつ

歩つかれの疲を休めて見よ。これらの物音、忽たちまち起り、忽やち止

み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風な

きに落ちて微かすかな音をし、それも止んだ時、自然せいしの静しょう蕭

を感じ、永エタルニテー遠ふけの呼吸せい身に迫るを覚ゆるであろう。武蔵

野のわきの冬の夜更ふけて星斗せいとらんかん闌干たる時、星をも吹き落しそくな

野分のわきがすさまじく林をわたる音を、自分は屢々しばしば日記に書

た。風の音は人の思を遠くに誘いざなう。自分はこの物凄ものすごい風の音の忽ち近く忽ち遠きを聞ては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけた事もある。

熊谷直好くまがいなおよしの和歌に、

よもすから木葉かたよる音きけは

しのひに風のかよふなりけり

というがあれど、自分は山家の生活を知して居ながら、この歌の心をげにもと感じたのは、実に武蔵野の冬の村居の時であった。

林に座って居て日の光の尤もつとも美しさを感ずるのは、

春の末より夏の初であるが、それは今ここには書くべき  
 でない。その次は黄葉の季節である。半ば黄ろく半ば緑  
 な林の中にあるい歩いて居ると、澄みわたった大空がこずえこずえ梢々々の  
 隙間すきまからのぞかれて日の光は風に動く葉末々々にはずえ砕け、  
 その美さ言いつくされず。日光とかうすい碓氷とか、天下の名  
 所は兎も角、武蔵野の様な広い平原の林がくま隈なく染まっ  
 て、日の西に傾くと共に一面の火花を放つというも特異  
 の美観ではあるまいか。若もし高きに登て一目にこの大観  
 を占めることが出来るならこの上もないこと、よしそれ  
 が出来難いにせよ、平原の景の単調なるだけに、人をし

てその一部を見て全部の広い、殆どほとんど限りない光景を想像さする者である。その想像に動かされつつ夕照に向むかって黄葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなに面白かるう。林が尽きると野に出る。

#### 四

十月二十五日の記に、野●を歩み林を訪とうと書き、又十一月四日の記には、夕暮に独り風吹く野●に立てばと書かいてある。そこで自分は今一度ツルゲ―ネフを引く。

「自分はたちどまった、花束を拾い上げた、そして林を去ッてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂ッて、射す影も蒼ざめて冷かになり、照るとはなく只ただジミな水色のぼかしを見るように四方に充みちわたった。日没にはまだ半時間も有ろうに、モウゆうやけがほの赤く天末を染めだした。黄ろくからびた刈かり株かぶをわたッて烈はげしく吹付ける野分に催されて、そりかえッた細かな落ち葉があわただしく起き上り、林に沿うた往來を横ぎって、自分の側を駈かけ通ッた、のらに向ッて壁のようにたつ林の一面は総てざわざわつき、細末の玉

の屑くずを散らしたように煌きらめきはしないがちらついていた。また枯かれ 艸くさ、莠はぐさ、藁わらの嫌きらいなくそこら一面にからみついた蜘蛛くもの巣は風に吹き靡なびかされて波たつていた。

自分はたちどまった……心細く成って来た、眼まなこに遮さへぎる物象はサツパリとはしていれど、おもしろ気もおかし気もなく、さびれはてたうちにも、どうやら間近になつた冬のすさまじさが見透かされるように思われ。小心な鴉からすが重そうに羽ばたきをして、烈しく風を切りながら、頭上を高く飛び過ぎたが、フト首めくを回

らして、横目で自分をにらめて、急に飛び上ツて、声をちぎるように啼なきわたりながら、林の向うへかくれてしまツた。鳩ほとが幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで来た、がフト柱を建てたように舞い昇ツて、さしてパツと一斉に野面のづらに散ツた——アア秋だ！誰はげやまだか禿山の向うを通ると見えて、から車の音が虚空こくうに響きわたツた……」

これは露西亞の野であるが、我わが武蔵野の野の秋から冬へかけての光景も、凡およそこんなものである。武蔵野には決して禿山はげやまはない。しかし大洋のうねりの様に高低起伏



して居る。それも外見には一面の平原の様で、寧ろ高台むしの処々が低く窪くぼんで小さな浅い谷をなして居るといった方が適當であろう。この谷の底は大概水田である。畑は重おもに高台にある、高台は林と畑とで様々の区画をなして居る。畑は即すなわち野である。されば林とても数里にわたるものなく否いな、恐らく一里にわたるものもあるまい、畑とても一眸いちぼう数里に続くものはなく一座の林の周囲は畑、一頃けいの畑の三方は林、という様な具合で、農家がその間に散在して更らにこれを分割して居る。即ち野やら林やら、ただ乱雑に入組いりくんで居て、忽たちまち林に入るかと思えば、

忽ち野に出るといふ様な風である。それが又た実に武蔵野に一種の特色を与えて居て、ここに自然あり、ここに生活あり、北海道の様な自然そのままの大原野大森林とは異て居て、その趣も特異である。

稲の熟する頃となると、谷々の水田が黄きはんで来る。稲が刈り取られて林の影が倒さかさに田面たのもに映る頃ころとなると、大根畑さかりの盛さかりで、大根がそろそろ抜かれて、彼方此方みづための水溜ながれ又は小さな流ほとりの溲ほとりで洗われる様になると、野は麦の新芽で青々となつて来る。或は麦畑の一端、野原のままに残り、尾花野菊が風に吹かれて居る。萱原の一

端が次第に高まつて、そのはてが天際をかぎつて居て、  
 そこへ爪先つまさきあがりのぼつに登て見ると、林の絶え間を国境に  
 連つらなる秩父ちちぶの諸嶺しよれいが黒く横よこたわツて居て、あたかも地平線  
 上はしつを走ては又た地平線下に没して居るようにも見える。  
 さてこれより又た畑の方へ下くだるべきか。或は畑の彼方の  
 萱原に身を横え、強く吹く北風を、積み重ねた枯草で避よ  
 けながら、南の空をめぐる日の微温ぬるき光に顔ながをさらして  
 畑の横の林が風にざわつき煌きらめき輝くのを眺ながむべきか。  
 或は又た直ちにかの林へとゆく路をすすむべきか。自分  
 は斯かくためらつた事が屢々しばしばある。自分は困つたか。否、

決して困らない。自分は武蔵野を縦横に通じている路は、  
 どれを撰えらんで行つても自分を失望ささないことを久しく  
 経験して知しって居るから。

## 五

自分の朋友が嘗かつてその郷里から寄せた手紙の中に「こ  
 の間も一人夕方に萱原かやはらを歩みて考へ申候、この野の中に  
 縦横に通ぜる十数の径みちの上を何百年の昔よりこのかた朝  
 の露さやけしといひては出で夕の雲花やかなりといひて

はあこがれ何百人のあはれ知る人や逍遙せいえうしつらん相悪あひにくむ  
 人は相避けて異なる道をへだたりて往き相愛する人は相  
 合して同じ道を手に手とりつつかへりつらん」との一節  
 があつた。野原の徑を歩みては斯かかるいみじき想も起るな  
 らんが、武蔵野の路みちはこれとは異ことなり、相逢あわんとて往  
 くとても逢いそこね、相避けんとて歩むも林の回り角で  
 突然出逢う事があるう。されば路という路、右にめぐり  
 左に転じ、林を貫き、野を横ぎり、真直まっすぐなること鉄道線  
 路の如きかと思えば、東よりすすみて又東にかえるよう  
 な迂回うかいの路もあり、林にかくれ、谷にかくれ、野に現わ

れ、又た林にかくれ、野原の路のように能く遠くの別路  
ゆく人影を見ることは容易でない。しかし野原の径の想  
にもまして、武蔵野の路にはいみじき実がある。

武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしてはな  
らない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処そこに見る  
べく、聞くべく、感ずべき獲物えものがある。武蔵野の美はた  
だその縦横に通ずる数千条の路を当あてもなく歩くことに由よ  
て始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、  
月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時  
雨にも、ただこの路をぶらぶら歩あそて思いつき次第に右

し左すれば随処に吾等を満足さするものがある。これが  
 実に又た、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感  
 じて居る。武蔵野を除て日本にこの様な処が何処にあ  
 るか。北海道の原野には無論の事、奈須野にもない、そ  
 の外何処にあるか。林と野とが斯くも能く入り乱れて、  
 生活と自然とがこの様に密接して居る処が何処にある  
 か。実に武蔵野に斯る特殊の路のあるのはこの故である。  
 されば君若し、一の小径を往き、忽ち三条に分るる  
 処に出たなら困るに及ばない、君の杖を立ててその倒れ  
 た方に往きたまえ。或はその路が君を小さな林に導く。

林の中ごろに到いたつて又た二つに分れたら、その小なる路  
 を撰んで見たまえ。或はその路が君を妙な処に導く。こ  
 れは林の奥の古い墓地で苔こけむす墓が四つ五つ並ならんでその  
 前に少しばかりの空地あきちがあつて、その横の方に女郎花おみなえしな  
 ど咲さいて居ることもあろう。頭の上の梢こずえで小鳥こどりが鳴ないて居  
 たら君の幸福である。すぐ引きかえして左の路を進んで  
 見たまえ。忽ち林が尽つきて君の前に見わたしの広い野が開  
 ける。足元から少しだらだら下さがりに成り萱が一面に生え、  
 尾花の末が日に光つて居る、萱原の先きが畑で、畑の先  
 に背の低い林が一叢ひとむら繁り、その林の上に遠い杉の小杜こもりが



見え、地平線の上に淡々あわあわしい雲が集あつまて居て雲の色にま  
 がいそうな連山がその間に少しずつ見える。十月小春の  
 日の光のどかに照り、小気味よい風がそよそよと吹く。若も  
 し萱原の方へ下りおりてゆくと、今まで見えた広い景色が  
 悉たゞごとく隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだらう。思  
 いがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れて居たのを  
 発見する。水は清く澄すんで、大空を横ぎる白雲の断片を鮮  
 かに映している。水の溼ほとりには枯蘆かれあしが少しばかり生えて  
 いる。この池の溼みちの径しばらを暫くゆくと又た二つに分れる。  
 右にゆけば林、左にゆけば坂。君は必ず坂をのぼるだろ

う。兎角とかく武蔵野を散歩するのは高い処高い処と撰びたく  
 なるのはなんとかして広い眺望ちようぼうを求むるからで、それ  
 でその望は容易に達せられない。見下ろす様な眺望は決  
 して出来ない。それは初めからあきらめたがいい。

若もし君、何かの必要で道を尋ねたく思わば、畑の真中  
 に居る農夫にききたまえ。農夫が四十以上の人であつた  
 ら、大声をあげて尋ねて見たまえ、驚おどろいて此方を向き、  
 大声で教えて呉くれるだろう。若し少女おとめであつたら近づい  
 て小声でききたまえ。若し若者であつたら、帽を取とつて慇懃いんぎん  
 に問いたまえ。鷹揚おうように教えて呉れるだろう。怒おこつてはな

らない、これが東京近在の若者の癖であるから。

教えられた道をゆくと、道が又た二つに分れる。教えて呉れた方の道は余りに小さくて少し変だと思つてもその通りにゆきたまえ、突然農家の庭先に出るだろう。果して変だと驚てはいけぬ。その時農家で尋ねて見たまえ、門を出るとすぐ往来ですよと、すげなく答えるだろう。

農家の門を外に出て見ると果して見覚えある往来、なる程これが近路ちかみちだなと君は思わず微笑をもらす、その時初はじめて教えて呉れた道の有難さが解わかるだろう。

真直まっすぐな路で両側りょうがわ共十分に黄葉した林が四五丁も続く

処に出る事がある。この路を独り静かに歩む事のどんな  
 に楽しかろう。右側の林の頂は夕照鮮あざやかにかがやいて  
 居る。おりおり落葉の音が聞えるばかり、四辺あたりはしんと  
 して如何にも淋さびしい。前にも後にも人影見えず、誰にも遇あ  
 わず。若しそれが木葉落ちつくした頃ならば、路は落葉  
 に埋れて、一足毎ごとにがさがさと音がする、林は奥まで見  
 すかされ、梢の先は針の如く細く蒼空あおぞらを指している。猶更なおさ  
 ら人に遇わない。愈々いよいよ淋しい。落葉をふむ自分の足音ば  
 かり高く、時に一羽の山鳩あわただしく飛び去る羽音に  
 驚かされるばかり。

同じ路を引きかえして帰るは愚ぐである。迷った処が今  
 の武蔵野に過ぎない。まさかに行暮ゆきくれて困る事もあるま  
 い。帰りも矢張凡やはりおよその方角をきめて、別な路を当てもな  
 く歩くが妙。そうすると思わず落日の美観をうる事があ  
 る。日は富士の背に落ちんとして未だ全く落ちず、富士  
 の中腹に群がる雲は黄金色に染そまつて、見るがうちに様々  
 の形に變ずる。連山の頂は白銀の鎖くさりの様な雪が次第に  
 遠く北に走はしつて、終は暗澹あんたんたる雲のうちに没してしまふ。  
 日が落ちる、野は風が強く吹く、林は鳴る、武蔵野は  
 暮れんとする、寒さが身に沁しむ、その時は路をいそぎた

まえ、顧みて思わず新月が枯木の梢の横に寒い光を放はなつているのを見る。風が今にも梢から月を吹き落しそうである。突然又た野に出る。君はその時、

山は暮れ野は黄昏たそがれの薄すすぎかな

の名句を思いだすだろう。

## 六

今より三年前の夏のことであつた。自分は或ある友と市中央の寓居ぐうきよを出いでて三崎町の停車場から境まで乗り、其処そこで

下りて北へ真直まっすぐに四五丁ゆくと桜橋という小さな橋がある、それを渡ると一軒の掛茶屋がある、この茶屋の婆ばあさんが自分に向むかつて、「今時分、何にしに來ただア」と問うた事があった。

自分は友と顔見合せて笑わらつて、「散歩に來たのよ、ただ遊びに來たのだ」と答えると、婆ばあさんも笑つて、それも馬鹿ばかにした様な笑いかたで、「桜は春咲くこと知しねえだね」と言った。其処そこで自分は夏の郊外の散歩のどんなに面白いかを婆さんの耳にも解わかるように話して見たが無駄むだであった。東京の人は吞氣のんきだという一語で消されて仕し了ま。

った。自分等は汗をふきふき、婆さんが剥むいて呉くれる甜瓜まくわうりを喰くい、茶屋の横を流れる幅一尺ばかりの小さな溝で顔を洗いなどして、其処たちいを立出たでた。この溝の水は多分、小金井の水道から引ひいたものらしく、能よく澄すんで居て、青草の間を、さも心地よさそうに流れて、おりおりこぼこぼと鳴ては小鳥が来て翼をひたし、喉のどを湿うるおすのを待まって居るらしい。しかし婆さんは何とも思わないでこの水で朝夕、鍋釜なべかまを洗うようであつた。

茶屋を出て、自分等は、そろそろ小金井の堤を、水上の方へとのぼり初めた。ああその日の散歩がどんなに楽



しかつたろう。成程小金井は桜の名所、それで夏の盛さかりにその堤をのこのこ歩くも余所目よそめには愚かに見えるだろ  
う、しかしそれは未だ今の武蔵野の夏の日の光を知らぬ  
人の話である。

空は蒸暑むしあつい雲が湧わきいでて、雲の奥に雲が隠れ、雲と  
雲との間の底に蒼空あおぞらが現われ、雲の蒼空に接する処は白  
銀の色とも雪の色とも譬たとえ難き純白な透明な、それで何  
となく穏かな淡々あわあわしい色を帯びて居る、其処そこで蒼空が一  
段と奥深く青々と見える。ただこれぎりなら夏らしくも  
ないが、さて一種の濁にごつた色の霞かすみのようなもの、雲と

雲との間をかき乱して、凡<sup>す</sup>べての空の模様を動揺、參差<sup>しんし</sup>、  
 任放、錯雜の有様と為<sup>な</sup>し、雲を劈<sup>つんざ</sup>く光線と雲より放つ  
 陰翳<sup>いんえい</sup>とが彼方此方に交叉<sup>こうさ</sup>して、不羈奔逸の気が何処とも  
 なく空中に微動して居る。林という林、梢という梢、草  
 葉の末に至るまでが、光と熱とに溶けて、まどろんで、怠<sup>なま</sup>  
 けて、うつらうつらとして酔<sup>よつ</sup>て居る。林の一角、直線に断<sup>た</sup>  
 たれてその間から広い野が見える、野良<sup>のら</sup>一面、糸遊<sup>いとゆう</sup>上騰  
 して永くは見つめて居られない。

自分等は汗をふきながら、大空を仰いだり、林の奥を  
 のぞいたり、天際<sup>てんざい</sup>の空、林に接するあたりを眺<sup>なが</sup>めたりし

て堤の上を喘ぎ喘ぎ辿てゆく。苦しいか？ どうして！ 身うちには健康がみちあふれて居る。長堤三里の間、ほとんど人影を見ない。農家の庭先、或は藪の間から突然、犬が現われて、自分等を怪しそうに見て、そしてあくびをして隠て仕了う。林の彼方では高く羽ばたきをして雄鶏が時をつくる、それが米倉の壁や杉の森や林や藪に籠つて、ほがらかに聞える。堤の上にも家鶏の群が幾組となく桜の陰などに遊で居る。水上を遠く眺めると、一直線に流れてくる水道の末は銀粉を撒たような一種の陰影のうちに消え、間近くなるにつれてぎらぎ

ら輝かがやいて矢の如く走はしてくる。自分達は或橋の上たつに立て、  
 流れの上と流れのすそと見比べて居た。光線の具合で流  
 の趣が絶えず変化して居る。水上が突然薄暗くなるかと  
 見ると、雲の影が流と共に、瞬またたく間に走はして来て自分達  
 の上まで来て、ふと止まって、急に横しにそれまて仕了しまうこ  
 とがある。暫くすると水上がまばゆく煌かがやいて来て、両側  
 の林、堤上の桜、あたかも雨後の春草のように鮮かに緑  
 の光を放はなつて来る。橋の下では何とも言いいようなない優  
 しい水音がする。これは水が両岸に激しして発はするのでも  
 なく、又浅瀬あさなのような音こでもない。たつぷりと水量みずかさがあ

つて、それで粘土質の殆ど壁を塗った様な深い溝を流れるので、水と水とがもつれてからまって、揉み合もあて、自から音を発するのである。何たる人なつかしい音だらう！

—— Let us match

This water's pleasant tune

With some old Border song, or catch,

That suits a summer's noon."

の句も思い出されて、七十二歳の翁と少年とが、そこから桜の木蔭こかげにでも坐すわって居ないだらうかと見廻みまわしたく

なる。自分はこの流の両側に散点する農家の者を幸福しやわせの人々と思った。無論、この堤の上を麦藁帽子むぎわらとステッキ一本で散歩する自分達をも。

## 七

自分と一所に小金井の堤を散歩した朋友は、今は判官になつて地方いっに行て居るが、自分の前号の文を読んで次の如くに書かいて送おくつて来た。自分は便利のためにこれを此処に引用する必要を感ずる——武蔵野は俗にいう

関八州かんはっしゅうの平野でもない。また道灌どうかんが傘かさの代りに山吹やまぶきの花を貰もらったという歴史的原でもない。僕は自分で限界を定めた一種の武蔵野を有して居る。その限界は恰も国境又は村境が山や河や、或は古跡や、色々のもので、定めらるるようにおのずか自ら定められたもので、その定めは次の色々の考から来る。

僕の武蔵野の範囲の中には東京がある。しかしこれは無論省はぶかなくてはならぬ、なぜなれば我々は農商務省の官衙かんがが巍峨ぎがとして聳て居たり、鉄管事件の裁判が有ったりする八百八街によって昔の面影おもかげを想像することが出来

ない。それに僕が近ごろ知合しりあいになつた独乙婦人ドイツの評に、東京は「新しい都」ということが有つて、今日の光景ではたとえ仮令徳川の江戸で有つたにしろ、この評語を適當と考えられる筋もある。斯様かようなわけで東京は必ず武蔵野から抹殺まっさつせねばならぬ。

しかしその市の尽くる処、すなわ即ちまちは町外ずれば必ず抹殺してはならぬ。僕が考には武蔵野の詩趣ししゆを描くには必ずこの町外れを一の題目とせねばならぬと思う。例えば君が住われた渋谷の道玄坂どうげんざかの近傍、目黒の行人坂ぎようにんざか、また君と僕と散歩した事の多い早稲田わせだの鬼子母神きしもじん辺の町、



新宿、白金しろがね……

また武蔵野の味を知るにはその野から富士山、秩父山脈こうのだい国府台等を眺ながめた考のみでなく、またその中央に包まれて居る首府東京をふり顧かえった考で眺めねばならぬ。そこで三里五里の外そとに出で平原を描くことの必要が有る。君の一篇ぺんにも生活と自然とが密接して居るということが有り、また時々色々なものに出で遇あう面白味えがいが描えてあるが、いかにも左様さようだ。僕は曾かつてこういうことが有る、家弟をつれて多摩川の方へ遠足したときに、一二里行き、また半里行きて家並やなみが有り、また家並に離れ、また家並

に出で、人や動物に接し、また草木ばかりになる、この変化のあるので処々に生活を点綴てんてつして居る趣味の面白いことを感じて話したことが有った。この趣味を描くために武蔵野に散在せる駅、駅といかぬまでも家並、即ち製図家の熟語でいう聯檐家屋れんたんを描写するの必要がある。

また多摩川はどうしても武蔵野の範囲に入れなければならぬ。六つ玉川などと我々の先祖が名づけたことが有るが武蔵の多摩川の様な川が、外にどこにあるか。その川が平たいらな田と低い林とに接続する処の趣味は、恰あたかも首府が郊外と接続する処の趣味と共に無限の意義がある。

また東の方の平面を考えられよ。これは余りに開けて水田が多くて地平線が少し低い故ゆえ、除外せられそうなれど矢張やはり武蔵野に相違ない。亀井戸かめいどの金糸堀きんしほりのあたりから木下川きねがわへん辺へかけて、水田と立木と茅屋ぼうおくとが趣を成して居るぐあい。矩合ぐあいは武蔵野の一領分である。殊ことに富士で分明わかる。富士を高く見せて恰あたかも我々が逗子ずしの「あぶずり」で眺むるように見せるのはこの辺に限る。又た筑波つくばで分明わかる。筑波の影が低く遥はるかなるを見ると我々は関八州の一隅ぐうに武蔵野が呼吸して居る意味を感ずる。

しかし東京の南北にかけては武蔵野の領分が甚はなはだせ

まい。殆ど無いといつてもよい。これは地勢の然らししかむる処で、且かつ鉄道が通じて居るので、乃すなわち「東京」がこの線路に由よつて武蔵野を貫いて直接に他の範圍と接続して居るからで有る。僕はどうもそう感じる。

そこで僕は武蔵野は先まず雑司谷ぞうしがやから起つて線を引いて見ると、それから板橋の中仙道の西側を通過かわごえして川越近傍まで達し、君の一編に示された入間郡いるまを包んで円まるく甲武線の立川たちかわ駅に来る。この範圍の間に所沢、田無たなしなどいう駅がどんなに趣味が多いか……殊に夏の緑の深い頃は。さて立川からは多摩川を限界として上丸かみまる辺まで下る。八

王子は決して武蔵野には入れられない。そして丸子まるこからしもめぐろ下目黒に返る。この範圍の間に布田ふだ、登戸のぼりと、二子ふたこなどの  
 どんなに趣味が多いか。以上は西半面。

東の半面は亀井戸辺より小松川こまつがわへかけ木下川きねがわから堀切ほりきりを包んで千住近傍せんじゆへ到いたつて止まる。この範圍は異論が有れば取除いても宜よい。併しかし一種の趣味が有って武蔵野に相違ない事は前に申した通りである——

## 八

自分は以上の所説に少しの異存もない。殊に東京市の町外れを題目とせよとの注意は頗る同意であつて、自分も兼ねて思付て居た事である。町外れを「武蔵野」の一部に入れるといえ、少し可笑しく聞えるが、実は不思議はないので、海を描くに波打ち際を描くも同じ事である。しかし自分はこれを後廻わしにして、小金井堤上の散歩に引きつづき、先ず今の武蔵野の水流を説くこ

とにした。

第一は多摩川、第二は隅田川すみだがわ、無論この二流のことは十分に書かいて見たいが、さてこれも後廻わしにして、更らに武蔵野を流るる水流を求めて見たい。

小金井の流ながれの如き、その一である。この流は東京近郊に及んでは千駄ヶ谷せんただ、代々木よよぎ、角筈つのはずなどの諸村の間を流れて新宿に入り四谷上水よつやとなる。又た井頭池いのかしらいけ善福池ぜんぷくいけなどより流れ出いでて神田上水かんだじょうすいとなる者。目黒辺を流れて品海ひんかいに入る者。渋谷辺を流れて金杉かなすぎに出ずる者。その他名も知れぬ細流さいりゆう小溝しょうきよに至るまで、若もしこれを他所よそで見

るならば格別の妙もなけれど、これが今の武蔵野の平地高台の嫌きらひなく、林をくぐり、野を横切り、隠れつ現われつして、しかも曲りくねって（小金井は取除け）流るる趣は春夏秋冬に通じて吾等の心を惹ひくに足るものがある。自分はもと山多き地方に生長したので、河といえば随分大きな河でもその水は透明であるのを見慣れたせいはじめか、初はじめは武蔵野の流ながれ、多摩川を除いては、悉ことごとく濁にごって居るので甚だ不快な感を惹いたものであるが、だんだん慣れて見ると、やはりこの少し濁た流れが平原の景色に適って見えるように思われて来た。



自分が一度、今より四五年前の夏の夜の事であった、  
 かの友と相携えて近郊を散歩した事を憶おぼえて居る。神田  
 上水の上流の橋の一つを、夜の八時ごろ通りかかった。  
 この夜は月冴さえて風清く、野も林も白紗はくさにつつまれしよ  
 うにて、何とも言い難りき良夜りょうやであつた。かの橋の上には  
 村のもの四五人集あつまつて居て、欄らんに倚よつて何事をか語り何  
 事をか笑い、何事をか歌うたて居た。その中に一人の老翁ろうおう  
 が雑まざて居て、頻しきりに若い者の話や歌をまぜツかえして  
 居た。月はさやかに照り、これらの光景を朦朧もうろうたる楕円形だえんけい  
 の裡うちに描き出して、田園詩の一節のように浮べて居る。

自分達もこの画中がちゆうの人に加わって欄に倚て月を眺ながめて居ると、月は緩ゆるるやかに流るる水面に澄んで映うつて居る。羽虫はむしが水を搏うつ毎ごとに細紋起て暫らく月の面おもに小皺こじわがよるばかり。流れは林の間をくねって出て来り、又た林の間に半円を描いて隠れて仕了しまう。林の梢こずえに砕けた月の光が薄暗い水に落ちてきらめいて見える。水蒸気は流れの上、四五尺の処をかすめて居る。

大根の時節に、近郊を散歩すると、これらの細流のほとり、到いたる処で、農夫が大根の土を洗って居るのを見る。

## 九

必ずしも道玄坂といわず、又た白金しろかねといわず、つまり  
 東京市街の一端、或は甲州街道となり、或は青梅道おうめみちとな  
 り、或は中原道なかはらみちとなり、或は世田ヶ谷街道せたがやとなりて、郊  
 外の林地田圃りんちでんぼに突入する処の、市街ともつかず宿駅とも  
 つかず、一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光  
 景を呈し居る場処を描写することが、頗すこぶる自分の詩興しきよう  
 を喚よび起すも妙ではないか。なぜ斯か様な場処が我等の感かん

を惹ひくだらうか。自分は一言にして答えることが出来る。  
即すなわち斯様な町外れの光景は何となく人をして社会とい  
うものの縮図でも見るような思おもいをなさしむるからであ  
らう。言葉を換えて言えば、田舎の人にも都会の人にも  
感興を起こさしむるような物語、小さな物語、而しかも哀れ  
の深い物語、或は抱腹ほうふくするような物語が二つ三つ其処そこら  
の軒先に隠れて居そうに思われるからである。更らに  
その特点を言えば、大都会の生活の名残なごりと田舎の生活の  
余波よはとが此処ここで落合おちあって、緩ゆるかにうずを巻いて居るよ  
うにも思われる。

見給え、其処みたまに片眼の犬が蹲うずくまって居る。この犬の名の通つて居る限りが即ちこの町外れの領分である。

見給え、其処に小さな料理屋がある。泣くのととも笑うのとも分らぬ声を振立ててわめく女の影法師かげほうしが障子に映うつて居る。外は夕闇ゆうやみがこめて、煙の臭においとも土の臭ともわかち難かおりき香よどが淀んで居る。大八車おちんちんが二台三台と続つづて通る、その空車からぐるまの轍わだちの響やかまが喧しく起りては絶え、絶えては起りして居る。

見給え、鍛冶工かじやの前に二頭の駄馬だばが立たって居るその黒い影の横の方で二三人の男が何事をか密ひそ密ひそと話し合あつて

居るのを。鉄蹄てつていの真赤ましかになったのが鉄砧かなしきの上に置かれ、火花が夕闇を破やぶつて往来の中程まで飛んだ。話して居た人々がどつと何事をか笑った。月が家並やなみの後ろの高い櫳かしの梢まで昇ると、向う片側の家根が白しろんで来た。かんでらから黒い油煙ゆえんが立て居る、その間を村の者町の者十数人駈かけ廻わってわめいて居る。色々の野菜が彼方此方に積んで並べてある。これが小さな野菜市、小さな糶売場せりばである。

日が暮れると直すぐ寐ねて仕了しまう家うちがあるかと思うと夜よの二時ごろまで店の障子に火影ほかげを映して居る家がある。

理髮所とこやの裏が百姓家やで、牛のうなる声が往来まで聞える、  
 酒屋の隣家となりが納豆売なっとうりの老爺ろうやの住家で、毎朝早く納豆々々  
 と噺しわがれごえ声で呼よんで都の方むかつへ向て出かける。夏の短夜が間  
 もなく明けると、もう荷車が通りはじめる。ごろごろが  
 たがた絶え間がない。九時十時となると、蝉せみが往来から  
 見える高い梢で鳴きだす、だんだん暑くなる。砂埃すなほこりが  
 馬の蹄ひづめ、車の轍わだちに煽あおられて虚空こくうに舞い上がる。蠅はえの群  
 が往来を横ぎってから家から家、馬から馬へ飛んである  
 く。

それでも十二時のどんが微かすかに聞えて、何処どことなく都

の空の彼方で汽笛の響がする。

この文第五までは国民之友三百六十五号に掲載し第六以下は三百六十七号に載せ第五までは秋より冬、第六は特に夏の武蔵野の一端を描きし也、共に明治三十一年一月の作。







日本文学電子図書館

---

武蔵野

著 者：国木田独歩

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---



日本文学電子図書館